

## ニュージーランド・ホリダイ その6

竹原 宏

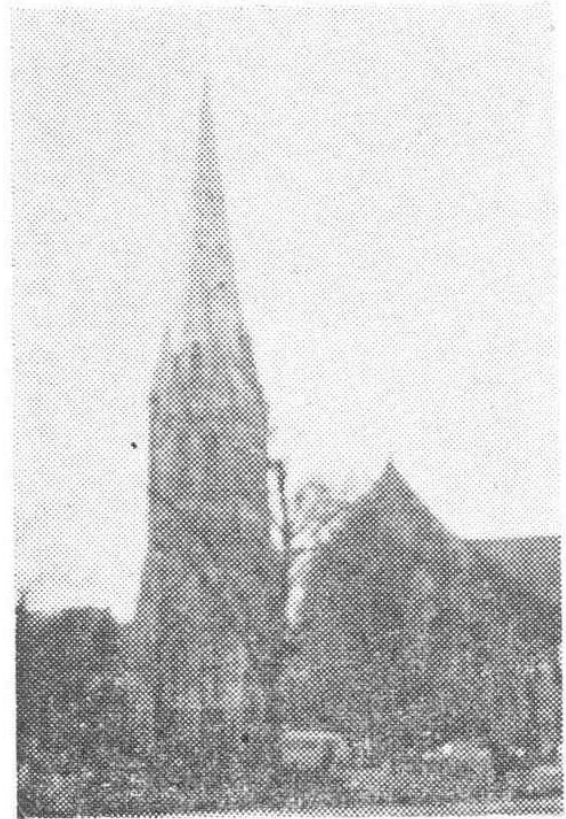
### 6、ニュージーランド ホリダイ

ニュージーランドを旅行していると、よく「where do you come from?」と聞かれる。日本人だと答えると、日本の何処から来たかと聞く。東京とか神戸なら簡単に答えられるが、岡山という名はそれほど海外に有名でないので、直ぐに答えが出ない。その時私は、何時も広島を知っていますかと反問する。そうすると、大げさなジェスチャーで、広島の前爆を忘れてなるものかという。その隣の街から来たのだという、納得して貰える。

次に、また決った質問がある。「ニュージーランドへ来てどのくらいになりますか、ニュージーランドをどう思いますか、ニュージーランドの旅行は楽しいですか。」これらの質問は何度となく繰り返されるものである。そして彼等は、一様にある返答を予期して、全神経を敬て私の顔を見つめるのである。私は決まったように、ニュージーランド・ホリダイはすばらしいと答える。そうすると彼等は、嬉しそうに「何故すばらしいのだ」と問う。「国が美しく、皆さん親切だから楽しいのだ」と答えると、彼等は安心する。彼等は祖国を愛している。そして、外国人の批評には非常に敏感である。私は彼等にお世辞を言って廻ったのではない。全く美しく親切な国であった。1ヵ月程の短期間で皮相な観察しかできなかったが、天国を旅しているような感じがあった。

ニュージーランド人の日本人に対する信頼感は強い。実をいうと、私達は出発前に、ある不安感を持っていた。ニュージーランドは、第2次大戦では対戦国であった。そして我々は有色人種であった。

しかし、ニュージーランドに着いて、その心配は全く杞憂であったことを知った。大戦中、極く少数ではあるが、シンガポールで日本軍に投降した人を除いて、多くの人が日本に対して好感を持っている。中には、朝鮮動乱で日本に駐留していた人もいる。そしてみんな日本を懐かしがっている。また、有色人種に対する差別感はない。黒人やマオリ族の青年



が、白人の女性と手を組んで歩いている姿を何回もみた。

ニュージーランド人は日本を隣国と心得ているのである。新聞には、しばしば日本の事が報道されている。彼等は、日本の国情をよく知っている。とくに、日本が最近工業国として飛躍をとげた事に対しては、畏敬の念を抱いている。ウェリントンの放送局は、日本の製品で出来ており、小型で出力の大きい事もよく知っていた。幸いにも、私達の旅行中は東京オリンピックの始まる直前で、とくに日本に対する関心が高まっていたのかも知れないが、我々が持っているニュージーランドに対する関心よりも、彼等が抱いている日本に対する関心の方が遥かに高いように思えた。

ある日、ハミルトンの近くの酪農家R氏のお宅に搾乳の実況を撮影するためにお邪魔したことがあった。ちょうど小学校3年生のお嬢ちゃんが勉強していたところに伺ったのであるが、彼女は我々が到着すると、飛び上がって喜んだ。何故かという、今

## 岡山畜産便り 1965.07

日学校で、日本について知っていることを何でも書きなさいという宿題をもらったところである。そこへ日本人が来たのだから大はしゃぎである。大騒ぎをしているところに宿題を出された女の先生も来られて、日本のことを色々と尋ねておられた。小学生でさえも、このように我が国に対して強い関心を持っているが、はたして日本の小学生が隣国のニュージーランドを知っているだろうか。

日本船の船長さんの話によると、数年前にニュージーランドの新聞が、これから先10年すると何処の国と1番親密になるだろうかという問題について、世論調査をしたところ、日本が英本国以上に親密になろうということが発表されていたそうである。ニュージーランドは畜産国であり、その輸出品の殆んどが畜産物である。現在は英国がもっとも大きなのお得意であるが、E・E・C機構の結成により将来輸出量が減少するのではあるまいかという不安を抱いておる。それに替る市場として日本に大きな期待を寄せているということも、日本に対する関心を高める要因であろうが、しかし、それ以上に敗戦の焼土の中から立ち上った我々日本人の根性は何といっても最大の魅力となっているのではなかろうか。

ニュージーランドでよく聞く面白い話がある。オーストラリアの病院に入院していた1ニュージーランドの患者が泣いているのを看護婦が見つけ、その理由を聞いたところ、今医者が「You will go to your home to die。」すなわち、あなたは、今日死ぬために家に帰るでしょう、といったというのである。看護婦は不審に思って、医者のところに行き聞いてみると、「あなたは、今日退院するでしょう」という意味だったという事が解った。ニュージーランドの患者は「today」（今日）を「to die」（死ぬため）と聞き違えたのであった。ところがニュージーランド人のaとiとの区別もまた我々には難かしい。どちらもアイに聞える。しかし、オーストラリアの方が、もっと難かしいのであろう。私達が、彼等の発音をまねて、日曜をサンダイ、月曜日をマンダイという、それはオーストラリア流だから止めろという。我々がサンデイという、彼等にはサンダイと聞こえるらしい。

この文のテーマもニュージーランド・ホリデイで

なくて、ホリダイにしておるが、ニュージーランド人に見せると叱られるかも知れない。